
俺と魔法と異世界と！

戸豆腐 犬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と魔法と異世界と！

【Zコード】

Z1990Y

【作者名】

戸豆腐 犬太郎

【あらすじ】

初投稿作品です！ちょっと意味わかんないことがあるかもしちゃせんが、そこは勘弁してください！

空虚な毎日を送る不良中学生の持輕じかる一真かずまは、突然異次元からやつてきた、能天気な中年のおっさん津飼つがい保士ほうじと出会い、自分に魔法の力が宿っていることを知る。

やがて、一真がくらす科学界と、保士がくらす魔法界の2つの世界は、500年前に倒された魔王によつて狙われていると知る。一真たちは魔王とその部下たちを倒すため、戦いに挑む！

第1話 俺と渦と学校と

パラレルワールド。

この宇宙に、我々の世界とともに存在しているとされる異世界。普段、そのいくつもの世界達は、平行線のよろこび、交わることなく影響することなく存在している。

事には始まりがあること、また終わりがあることと同じように、当たり前で、また必然的なことなのである。

学校は嫌いではない。

両親を亡くした俺に、わずかだが楽しみを与えてくれた場所だ。それに行かせてくれてる叔父にも感謝してる。「楽しい」と思った時もあつた気がする。

けど今は「嫌いではない」だ。

何か足りない気がしてならない。一言で言えば「つまらない」だ。もつと広い世界がある。いつも思ひとどりしても「学校なんて……」つてなる。

そういうながらも今日も登校する。昨日の喧嘩のキズがまだ痛む。

校門を過ぎる。やつぱりいた。いつもの奴。

「やがて、眞！ 今田君に会がある！」

「おー、ちよつと来でよ~。かづめ~！」

しつこく「ペーチョを鬻うとするクラスメイトをシカトしてゲタ箱に向かう俺。ほとんどの連中が、俺に気づくと道を開けていく。

自分の靴を掴む。何度も喧嘩でもうボロボロだ。

ボロ靴は俺に乱暴に履かれ、廊下を進まされる。途中すれ違う教師は誰一人として、止められていない学ランのボタンを注意はしない。教室の戸を開ける。教室の空気が変わる。これもいつものこと、気にはしない。こつして今日も同じように始まる学校生活。全く楽しみはない。

チャイムが鳴り、始まる授業。これこそが俺の学校観を「嫌い」から「嫌いではない」に変えているものだ。教師は「不良のくせに授業は黙つてきく」という変わった生徒に戸惑いながらも、今日の授業を終わらせる。

放課後。特に何もせず帰り道を歩く。なのに今日も田をつけられ、そして喧嘩。もちろん負ける事はない。それでも達成感なんてものもなく、ただ虚しさを感じる。そんな事を毎日繰り返すだけ…。俺の人生はただそれだけ…。

「グワーン！」

突然謎の音がなった。と同時に空に巨大な黒い渦が現れた。そのプラックホールのような渦は段々と大きくなり、さらに風が吹きはじめた。まわりの落ち葉が、渦に吸い込まれていく。一真は自分が吸い込まれそうになっているのを感じた。何かいやな予感…。そんな事を考えている間に、風が一段と強くなつた。危険を感じ、電信柱にしがみつく。

（ヤバい！）

風はさらに強まり、もう電信柱は細い枝ほどにしか頼りにならない、と感じるほどの風になつた。喧嘩の疲労から電信柱を掴む力がどんどん弱くなつていく。

（もうダメか！）

限界を感じたその時、突如風はやみ、一真はそのまま地面に叩きつけられた。

「イッテ〜。」

コンクリートにぶつけた、背中の痛みを感じながら一真が起き上がるうとしたした瞬間、

「ドカッ！！」

第2の衝撃はあまりにも強すぎた。

なんと人が空から落ちてきて、一真はその人の下敷きになっていたのだ！

そして一真の上では中年のおっさんがのびていた…。

第2話 家と爆発とおひねさん

巨大な黒い渦…。

遠い昔に見たことがあるような無いような…。

ハツ！

「目が覚めたか？」

変なおじさんぐ俺を見てる…。一体どうしてこんなことに…ってそうだ！

「お、おっさん空から落ちてきやがった！」

一真がさけぶ。

「あ～スマンね！押し潰しちゃつて！いや～まさかあんなとこでパラレルトンネルがひらくとは思わず…。」

マントのような物を身に付けたそのおっさんは、まごつたという顔をして言つた。

「はあ？何いつてんのかサッパリわかんねえよー。」

一真がイライラと言つた。

「ん？ああそっかここは科学界だつたなー。どおりでホウキやじゅうたんが飛んでいいわけだ。」

「人の話きけよ！お前誰なんだよー！」

一真が怒鳴つた。おっさんは少し驚いた顔をしたが、すぐに笑つて

「私の名前は保士。津飼 保士だ！君は？」

と言つた。

一真は少し迷つたが、

「俺は持輕 一真だ。それよりあんたのいつた科学界ってのはなんだよー？」

と言つた。

「まあ立ち話もなんだから、君の家に行こうじゃないか！」

保士が明るく言つた。

「はあ？ 誰がお前なんか…。」

「いやー！君は案内せやるを得ないよ。」

そういうと保士はマントの中から何せ枝のよつなものを取り出し、それを一真に向けながら言つた。

「リブ・ラス・デルタ！案内せよー！」

「……。」

何も起きない。

一真はもう付き合つても無駄だと思い、家の方に歩き出しだ。

「お～い！ちょっと待てよー！あれ～おかしいなあ…。」

保士は一真を呼び止めたが、一言だけ言つて、そのまま足を進めた。

「近くにいい病院があるぜー！」

家の近くまでくる頃には、もう空は赤く染まり始めていた。周りは家しかない。閑静な住宅街に一真の家はある。電気、ガス、水道もみんな叔父さんが出してくれてる。本当にありがたい。両親がいればもつとありがたいのだろうけど。

玄関の前まで来て鍵が無くなつてゐるのに気づいた。

(しまつた…。どこで無くしたかな。もしかしてさつきの場所か？けどあそこには戻りたくねえな…。)

さつきの男の顔が浮かび上がる。本当になんだつたんだあいつは…。そんな事を思つていると、近くで聞き覚えのある声がした。

「鍵はここにあるぜー！」

声の主を見ると、予想通りわつとき思い浮かんだ顔があつた。

「なるほどここかー！君の家は。いやあいい家じゃないか！」

保士が笑つて言つた。

「おっさん良い加減にしろよー。あんたになんか付き合つてらんねえよー。」

一真がさけぶ。

「おいおいそれはないだろ！…。せつかく鍵を持って来てやつたのに。」

と保土は元気なく言った。

「あ～分かった分かったー…どいつもー…わあ、せつぞと返せ！」

一真が怒って言う。

「全く…。君は素直じやないねえ…。あつ…わづだー今度こそ見せてやるよ！」

保土は突然思いついたように口をつぶつぶ、また例の枝のよつなものを取り出した。

「あ～もうーなんなんだよ！何を見せるつてんだよー。」

一真是キレて怒鳴った。だが保土は冷静にただ一言、

「魔法だよー！」

と言つと、一ヤツと笑い、枝を一真の家に向けて、大声で叫んだ。

「リープラス・デルタ！爆ぜよー！」

保土の叫び声とほぼ同時に一真の家は爆発した。

第3話 杖と料理と異世界との接觸

粉々になつた家の破片を見て呆然とする一真。その後ろで誇らしげにする保士。沈黙を破つたのは保士だった。

「どうだ！これが魔法の力だ！科学界に住む一真は初めてみただろ！おつと鍵を返し忘れて…」

「何が魔法だ？！俺の家どうしてくれんだよ！鍵必要なくなつちやつたじやないか！！」

一真是出せるだけの声をありつたけ出し怒鳴った。

「まあそうキレるなよ。こんな魔法の力を持つてすればちょちょいのちよいだ！」

保士がのんきに言つ。

「ふざけんな！どうすんだよ俺の家！」

「分かつた分かつた！リプラス・デルタ！修復せよ…」

例のかけ声と同時に破片がどんどんもとの位置に戻つていく。数秒後には、すっかりもとの形に戻つていた。一真是それをただただ唖然としながら見ていた。

「どうだ！これが魔法の力だ！」

ドヤ顔の保士をみながら、一真是まだ今起きたことの整理が付けられずについた。

家に入つていいく。保士と共に。やはりここまできたら、話を聞かずにはいられない。けどその前に夕飯を食べない事は、もつと出来なかつた。

「コンビニで買って来つからちょっと待つてくれ。」

一真がいうと、保士は驚いた顔をして、

「毎日そんな食事なのかな？」

「たずねた。一真是当然だ、と言つ顔で、

「ああ。」

と短く答えた。

すると保士は突然立ち上がり、

「いかんぞ！食事はバランスよくとらねばいかん！その為には手料理のほうがいいぞ！」

と叫んだ。一真は呆れながら、

「誰が作るんだよ。おっちゃん作れんのかよ？」

と言つたが、保士は平然と、

「いや、作れん！」

と答えた。

じゃあ無理じゃねえか、と言おつとした瞬間、保士はまた例の枝と、

「リブ拉斯・デルタ！調理せよ！」

というかけ声と共に、テーブルの上に、様々な材料を出した。
そしてそれらはそれぞれ浮かびあがり、まな板の上や鍋の中などへ
次々と移動していく。包丁やおたまも勝手に動きだし、その様子は
まるで透明人間が料理をしているようだつた。

「多分20分もすればできるだろ？　じゃあ、それまで話をしよう
か。」

「取り合えず」これは杖つていうもんで、これこそが魔法を出すため
の道具だ。」

保士はあの枝のようなものを指しながら言つた。一真はまだ、隣で
自由に動き回つている調理器具に目を奪われながらも、

「それよりまずおっちゃんは誰でどこから来たのかとかの方が気が
なるんだけど。」

と言つた。

「そつか！まあやつだよな。一真、『パラレルワールド』って知つ
てるか？」

保士の質問に、

「聞いた事はある。たしか『この宇宙に、俺らの世界とともに存在

しているとわれる異世界』だっけ？けどあれは空想のものなんじゃないのか？」

と一真が答える。

「いや、この科学界ではそう考えられているが、私たちの魔法界では現実のものとされているんだよ。」

「パラレルワールド」が現実のもの！？ ん？ 待てよ…

「まさか昼間からずっとと言つてる『科学界』とか『魔法界』ってのは…。」

「そう！想像してるとおりそれぞれ別の世界、『異世界』だ！」

その時、丁度料理が出来たようだ。料理が乗った皿と箸がスイーツと、一真と保士の前にやつて来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1990y/>

俺と魔法と異世界と！

2011年11月11日12時01分発行